

言語学ゼミナール XV(2010.02.20)報告 (MULTILINGUALISM - 1)

昨年夏の11回目のゼミナールまでは、言語学の理論的な問題を扱ってきました（第1回報告の末尾をご覧ください）。その後3回ほどは、同僚達の調査報告やアイヌ語の問題など時期に即した話題を取り上げてきましたが、このあたりから見方を変えて、しばらく Multilingualism（多言語状況）に関わるいくつかの問題を取り上げてみたいと思います。

仮に現今の通説のように、ヒト（新人）がアフリカのエヴァの子供達だったとしましょう。その子達が巣立って各地に散りはじめたときから、ヒトはの集団は否応なしに多言語使用者だったのでしょうか。つまり多言語状況はヒトの本来の姿だと考えても間違っていないでしょう。この多言語状況が危機に曝されたのはそう昔ではないようです。古代国家の状況はひとまず置くとして、多言語状況が本当に脅かされるにいたったのは近代国家の成立に始まったと言えるようです。まずその典型的な姿を見てみましょう。

「最後の授業 --アルザスの一少年の物語--」という誰でも知っているお話があります。アルフォンス・ドーデ（1840-1897）が普法戦争（1870-1871）末期にフランス国民の戦意向上のためにパリの夕刊に書いたデマゴギーで、ザール川最上流の村のフランツ（Franz）君が相変わらず遅れて学校へ駆けつけると、アメル（Hamel）先生が教壇から、今日はフランス語の最後の授業だ、フランス語は世界で一番美しいことばだと大演説をぶって、最後に「フランス、アルザス」万歳と黒板に大書して、涙ながらに教室を去っていくというお話です。アメル先生の大演説の中に「ある民族がどれいとなっても、その国語を保っているかぎりには、そのろう獄のかぎを握っているようなものだから、、、」（岩波文庫桜田佐訳）という台詞があります。これはドーデの先輩フレデリック・ミストラル（1830-1914）の「それ（民族）はその言語を握っているなら、自分を鎖から解き放つ鍵を握っているのだ」の間違った受け売りです。

ところでフランツ君やハメル先生の母語は何だったのでしょうか。フランツ君のはゲルマン系アレマン語の方言アルザス語でしょう。またアメル先生も名からして多分同じでしょう。だとすると、彼らが握っているはずの言語はフランス語ではなくて、このゲルマン系のアルザス語です。だとするとこのお話は完全にひっくり返って茶番になってしまいます。ドーデの意図はこの社会状況を隠蔽して遠く離れたパリの大衆のために

戦意高揚のためのお話を作り上げることにありました。しかしよく見ると、フランスの戦時ナショナリズムがこの地方の言語（かれらはパトワ（=訛）と呼ぶ）を圧殺する有様を見事に書いていることが分かります。

さてこのフランツ君のことばアルザス語はまだ生きています。ストラスブール（=シュトラスブルグ）にルネ・シッケレ（René Schickele）協会という地域団体があって、土地の言語であるアルザス語の保存と普及のために働いています。この協会の作ったポスターをはがき風にしたものがありますので、それを見てみましょう。



少年（左）：フランス語で「このとりはどうしてここに降りてこないで飛んでいっちゃうの？」

おじいさん（右）：アルザス語で「坊や、もうついたかなと思って降りようとしても、まだフランス語ばかりでアルザス語が聞こえてこないから、まだつかないと思っちゃうんだよ。」

少年の後ろにフランス語で：「アルザス語を落ち込ませるな！」

おじいさんの後ろにドイツ語で：「二言語使用 — われらが未来 —」

下に大きくアルザス語で：「子供達にアルザス語を教えよう！」

ルネ・シッケレ協会 ストラスブール CCP 958-81 D, Oberlin 町 31

ここからはっきりと分かることがあります。それは、多言語状況に対する障碍はナショナリズムの国語政策であるということです。逆に言うと、国家主義的国語礼賛が人間集団にもともと備わっている多言語共生にたいする正面の敵であるとも言えるでしょう。

参考：田中克彦『ことばと国家』岩波新書 1981

金子 亨「アルザス語の現在」（初『ドイツ語学研究 1』クロノス 1985、『先住民族言語のために』草風館 1999 所収）